九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

三種『重刻元本題評音釋西廂記』異同考

黄, 冬柏
九州共立大学 : 教授

https://doi.org/10.15017/1906428

出版情報：中国文学論集. 46, pp.94-110, 2017-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

三種『重刻元本題評音釋西廂記』異同考

黄　冬柏

一　はじめに

国立公文書館内閣文庫に収める明・万暦の熊龍峯刊『重刻元本題評音釋西廂記』、陳邦泰刊『重校北西廂記』、天理大学図書館に収める游敬泉刊『李卓吾批評合像北西廂記』、及び成簣堂文庫に収める胡少山刊『新刻考正古本大字出像釋義北西廂』は、いずれも中国本土ですでに失われた版本である。そのうち、本稿で考察の対象とする『重刻元本題評音釋西廂記』は、内閣文庫と東北大学附属図書館所蔵の万暦二十年（一五九二）の熊龍峯刊本の他、上海図書館所蔵の万暦八年（一五八〇）の徐士範刊本及び中国国家図書館所蔵の万暦二十九（一六〇一）の劉龍田刊本がある。

中国における『西廂記』版本研究の第一人者である蔣星煜（一九二〇－二〇一五）は、上海図書館で徐士範刊本を発見し、次のように述べる。

在現存明刊本『西廂記』中、徐士範刊本是最早以不分本不分折而全劇分成二十齣、毎齣以四字句標題的一箇本子。[1]

現存の明刊本『西廂記』の中で、徐士範刊本は本や折を分けず全劇を二十齣に分け、齣ごとに四文字を以って標題とする最も早いテキストである。

弘治岳刻本雖然收録了大量附録、……但是此書刊印時、『園林午夢』尚未問世、所以就未收録。以『園林午夢』作爲附録、是從徐士範刊本開始。[2]

弘治岳刻本は大量の附録を収めているが、…刊行時に、『園林午夢』はまだ世に出ておらず、収録されていない。『園林午夢』を附録にしたのは、徐士範刊本が最初である。

蔣星煜は『西廂記』研究の発展に大きな役割を果たしたが、この点は間違っている。何故かというと、成簣堂文庫所蔵の『新刻考正古本大字出像釈義北西廂』は、同じ体裁で一年早く（万暦七年）刊行されたからである。著名な文学研究家である鄭振鐸（一八九八～一九五八）は劉龍田刊本を発見して善本として『古本戯曲叢刊初集』（上海商務印書館影印本、一九五四）に収め、特に徐士範刊本のない挿絵を絶賛された。

劉龍田刊『西廂記』、其插圖、易狹小之小幅而成全頁之巨製、實爲宋元版畫之革命。[3]

劉龍田刊行『西廂記』の挿絵は、元の小さな図版を一頁大の大きさに変えており、実に宋元時代の版画の革命である。

また、蔣星煜も「論徐士範本『西廂記』」の中に次のように指摘される。

應該承認劉龍田刊本確是善本。但是這箇刊本的訛錯缺脱是比較多的、對於本文或其他附録、我們可以用其他現存明刊本『西廂記』來校勘、至於「題評」、其他明刊本没有、熊龍峯刊本既遠在日本、而且也是根據徐士範刊本翻刻的、當然没有用徐士範刊本校勘那麽可靠。[4]

劉龍田刊本は確かに善本だと認めるべきである。しかしこの刊本の誤字や欠落はかなり多い。本文或いは他の附録については、我々は他の現存する明刊本『西廂記』で校勘することができるが、『題評』においては、他の明刊本は無く、熊龍峯刊本は遠く日本にあり、しかも徐士範刊本に基いて翻刻されたものなのだから、当然ながら徐士範刊本で校勘するのは信用が置けない。

時代の制約により、鄭振鐸は熊龍峯刊本の存在を知らなかったが、実は劉龍田刊本の挿絵は全く熊龍峯刊本によるものである。蔣星煜も熊龍峯刊本を実見していないが、「熊龍峯刊本も徐士範刊本によって翻刻されたもの」との判断は果たして正確であろうか。

本稿は、内閣文庫所蔵の熊龍峯刊『重刻元本題評音釋西廂記』の体裁、序文、本文、標題、題評、釋義、注音、附録、挿絵などに詳細な考察と分析を行った上で、同じ書名を持つ徐士範本及び劉龍田本との比較考察を通して、三種の刊本の伝承関係と、徐士範刊本と劉龍田刊本の間に刊刻された熊龍峯刊本の特徴及び『西廂記』流伝に果たした役割について明らかにしたい。

二　三種『重刻元本題評音釋西廂記』について

（一）内閣文庫所蔵の熊龍峯刊本

内閣文庫所蔵の『重刻元本題評音釋西廂記』（以下「熊本」と略す）は、明の余瀘東が校正し、万暦二十年（一五九二）に熊氏忠正堂より刊行された。[5] 本文二十齣及び附録『錢塘夢』『鶯紅下棋』『園林午夢』それぞれの前に、合計二十三枚の挿絵があり、本文二十齣及び附録『鶯紅下棋』それぞれの末尾に『釋義』と『字音』がある。「内閣文庫」、「昌平坂学問所」、「浅草文庫」、「林氏蔵書」「江雲渭樹」及び「日本政府圖書」などが押印されているから、もともと林羅山の蔵書で、昌平坂学問所、浅草文庫を経て内閣文庫に収められたことが分かる。林羅山は長崎で『本草綱目』などの漢籍と一緒にこの書を購入したようだ。[6]

熊本は上巻22・42葉と下巻37・48葉を欠いており、そのため第四・七・十八・二十齣の四枚の挿絵がない。東北大学所蔵の熊本は、表紙・序文と附録を欠き、上巻2・48・54・55・59・63葉と下巻6・10葉を欠いている。

熊本は南曲伝奇の体裁である「末上首引」から始まり、「題目」・「正名」の後に本文である第一齣『佛殿奇逢』が続く。元雑劇の体裁である一本四折、五本二十折ではなく、二十齣（幕）に分けている。明代においては、南曲伝奇が益々隆盛し、北曲雑劇が日々衰退していったため、『西廂記』の坊刻本もその当時の市場のニーズに応えたもので

あろう。また、挿絵に関しても、文字を読むばかりではなく「絵」をも見たいという読者の嗜好に合わせ、販路を拡大させるという商業的な意図があったと思われる。熊本の挿絵は上辺に標題（四字、『錢塘夢』は三字）、左右両側に各十二字前後の対聯がある。欠落する第四・七・十八・二十齣の挿絵を除いて、全十九枚の挿絵は次の通りである。

第一齣　佛殿奇逢
游寺遇嬌娥送目千瞧無限意
歸庭逢秀士回頭一顧許多情

第六齣　紅娘請宴
紅娘奉命來迎東閣宏開酬采筆
君瑞聞言請宴西廂隨步赴藍橋

第二齣　僧房假寓
假寓僧房張珙乘機圖匹配
來參佛寺紅娘奉命問修齋

第八齣　琴心寫懷
月下挑弦訴恨者先存其意
花前聽韻知音者已解其心

第三齣　墻角聯吟
墻角詠新詩試引佳人興趣
園中賡舊韻更添才子情懷

第九齣　錦字傳情
意求鸞凰未能成虧張珙病纏書舍
欲寄鱗鴻無自達托紅娘迎到妝樓

第五齣　白馬解圍
晉救賊圍張學士得婚盟才伸簡牘
蒲關兵至杜將軍爲友誼始動干戈

第十齣　玉臺窺簡
發來假怒一場明掩思春外迹
回奉新詩四句暗藏乘夜中情

第十一齣　乘夜踰墻
漫道文才海漾深尚難猜四言詩句
誰知色胆天來大却易跳百尺垣墻

第十二齣　倩紅問病
紅送藥方片紙暗傳雲雨約
生聞信息数言勝服洞靈丹

第十三齣　月下佳期
竚立閑階月下候佳人密約
出離畫閣花前赴才子幽期

第十四齣　堂前巧辨
小紅娘訴一段緣因将無做有
老夫人主百年姻眷弄假成真

第十五齣　秋暮離懐
今朝酒別長亭繾綣前來把盞
異日名題金榜叮嚀早整歸鞭

第十六齣　草橋驚夢
勞役不堪投宿休嫌村店小
別離難捨夢魂豈憚路途遙

第十七齣　泥金捷報
才子夺魁書寄一封歸捷報
佳人回簡物緘六事慰相思

第十九齣　詭謀求配
密地見紅娘爲造崔門修舊好
當場辭鄭子已言張氏締新婚

錢塘夢
石匣葬孤骸月下遙聞來玉珮
錢塘懸夜夢窗前驚醒續瑤篇

鶯紅對弈
萬花亭上着圍棋勝負却因頻點指
孤月臺前思窃玉姻緣不就倍傷心

園林午夢
困倦一漁翁熟睡眠成午夢
風流雙士女齊來講論春情

以上の標題と対聯を読むと、文字数は整っているが、元雑劇『西廂記』の美辞麗句に比べて浅薄通俗だと言える。挿絵は、中心に置かれた人物が舞台俳優のようなしぐさをし、しかも実際の舞台配置と同じように左右両側に対聯を配置しており、まるで舞台をそのまま切り取ったかのような印象を受ける。これもまた読者の興味を増し、販路を拡大するための試みであろう。明刊本の挿絵は主に導読（閲読の指導）、促銷（販路の拡大）、装飾と批評の役割がある。明代における建陽の書林は最も繁栄の時期を迎えており、坊刻も例外なく、刊行した小説と戯曲の中に大量な挿絵が附されている。その中には双峯堂の余象斗によって刊行された作品が最も多く、万暦十六年（一五八八）に刊行された『京本通俗演義按鑑全漢志傳』の上図下文式はその代表的な挿絵である。また、『新刻按鑑全像批評三國志傳』のように、上評中図下文式という版式も見られる。これらの版式は挿絵のスペースが制限されるため、狭くて窮屈な感じが否めない。これらと比べて、熊本の単面整版式では、人物が生き生きとして画面に気品と迫力があり、しかも鮮やかな標題と対聯を加えることによって、読者により一層の美感と楽しさを与える。上図下文式の歴史小説を大量に刊行した明末建陽の出版の中で、恋愛物語を題材とする戯曲の熊本とその単面整版式による挿絵は非常に貴重な存在だと言える。

三種『重刻元本題評音釋西廂記』異同考

(二) 上海図書館所蔵の徐士範刊本

明・弘治十一年（一四九八）金臺岳家刊本『新刊大字魁本全相參增奇妙註釋西廂記』は、現存するテキストのうち、最も早く刊行された『西廂記』全本である。学界で「弘治本」と称すこの刊本は『古本戯曲叢刊初集』（北京大学所蔵、上海商務印書館影印本、一九五五）に収める。万暦七年（一五七九）成簣堂文庫所蔵の金陵少山堂刊本『新刻考正古本大字出像釋義北西廂』は、現存する万暦の『西廂記』刊本の中で最も刊行時期の早いものである。

その次に刊行が早いのは、万暦八年（一五八〇）の徐士範刊本『重刻元本題評音釋西廂記』（以下「徐本」と略す）である。これは、蔣星煜が最初に上海図書館で発見したが、その後、中国国家図書館にも同じ刊本が所蔵されていることが分かった[7]。

徐本の版式は熊本と基本的に同じであるが、頁数の下に刻工の姓名を刻んでいる（熊本無）。本文の前に程巨源が著す『崔氏春秋序』と徐士範が題す『重刻西廂序』（熊本無）があり、また、本文二十齣のほかに『西廂会真記』、『錢塘夢』、『秋波一轉論』、『閨怨蟾宮』、『園林午夢記』、『松金釧減玉肌論』を附録し、巻末に『北西廂記釋義大全』と『北西廂記字音大全』を付け加える。

『崔氏春秋序』と『重刻西廂序』という二編の序文は、『西廂記』の作者及び『西廂記』に対する評価などの問題について述べられており、後世に大きな影響を与えた。作者については、明清以来、様々に論じられてきたが、その中で主たるものは、概ね次の六説、すなわち王実甫単独説、関漢卿単独説、王作関続説、関作王続説、関作王補『囲棋闘局』説、關作董珪続説である。そのうち、嘉靖（一五二二～一五六六）頃に出現した「王作関続説」（『西廂記』の第一本より第四本に至る十六折が王実甫の原作で、第五本の四折は関漢卿の続作だとする説）は、当時の文壇の盟主である王世貞が著す『藝苑卮言』に由来するため、王驥德、凌濛初の賛同を得て大いに盛行した。王驥德と凌濛初がこの説に賛同したのは、徐本の序文の影響を受けた結果だと言われる[8]。

『西廂記』の釋義注音の刊本の中で、徐本は釋義・注音と題評を兼ね備える最も早い刊本である。弘治本と比べて、釋義の項目が減っているが、字音は逆に数百項目を増加している。徐本は現存する早期の『西廂記』評点本であり、題評の内容は概ね三つの種類に分けられる。第一は、作品構造、人物性格、語言風格などについての評価と

分析である。例えば、第一齣『佛殿奇逢』では、「可真是人值殘春蒲郡東、門掩重關簫寺中。花落水流紅閑愁、萬種無語怨東風」という歌に対して、「開巻便見情語」と評語を付けている。これらの題評は『西廂記』の主旨・作者の意図及び語言の表現を十分に理解した上で精確な評価を行って、独自の見識を持っている。第二は、本文中の典故や俗語・方言について解釈を行う評語である。例えば、第十五齣『秋暮離懐』では、「若不是酒席間子母毎當回避、有心待與他擧案齊眉」に対して、「擧案齊眉用梁鴻故事」と提示している。また、「方言」・「郷語」・「元時郷語」・「北方方言」・「中原諺語」・「教坊中語」・「釋家言」・「喝采語」などの言葉に関する題評は随所に見られる。第三は、曲牌と音律に関する批評である。例えば、第十二齣『倩紅問病』の【綿搭絮】という曲について、「此折越調用侵尋韻、本閉口而此間誤入真文、乃知全璧之難也」と指摘し、また、第十五齣『秋暮離懐』【四煞】の題評は「此下多可入唐律」という。

凌濛初の『西廂記』と劉世珩の『暖紅室彙刻傳劇』に収める『西廂記』は徐本の題評をかなり採録している。徐本は明代において既に善本と誉められている。例えば、龍洞山農の「刻重校北西廂記序」に、

詞曲盛於金元、而北之『西廂』、南之『琵琶』尤擅場絶代。……北詞轉相摹梓、踳駁尤繁、唯顧玄緯、徐士範、金在衡三刻、庶幾善本、而詞句增損、互有得失。[9]

詞曲は金元代に盛んとなり、北の『西廂』、南の『琵琶』がとりわけ一世を風靡した。…北詞は写しあって出版し、誤りが多かったが、ただ顧玄緯、徐士範、金在衡の三つの刻本は、ほぼ善本であり、語句の増減は、それぞれに取るところがある。

と称している。また、王驥徳の「新校注古本西廂記自序」の中からも徐本に対する好評の一斑を窺える。

余刻紛紛、殆數十種、僅毗陵徐士範、秣陵金在衡、錫山顧玄緯三本稍稱彼善。徐本間詮數語、偶窺一斑。[10]

私の刻本はたくさんあって、大体数十種くらいだが、毗陵の徐士範、秣陵の金在衡、錫山の顧玄緯の三つの

刻本だけはあちらが善本だと言ってもいい。徐本は数語調べるだけで、その水準を窺い知れる。

(三) 中国国家図書館所蔵の劉龍田刊本

中国国家図書館所蔵万暦二十九年（一六〇一）劉龍田喬山堂刊本（以下「劉本」と略す）は、『元本題評西廂記』の題名で『古本戯曲叢刊初集』に収める。本文上巻の首行に「重刻元本題評音釋西廂記巻上」と題し、次行に「上饒余瀘東校・書林劉龍田繡梓」と記す。附録に『新增鶯紅下棋』、『園林午夢記』、『北西廂附余：西廂別調、打破西廂八嘲、閨怨蟾宮』、『秋波一轉論』、『松金訓減玉肌論』、『錢塘夢』、『蒲東崔張珠玉詩集』がある。巻末に「喬山堂劉龍田梓」と刻む。本文二十齣と附録『鶯紅下棋』の末尾に『釋義』と『字音』をそれぞれに加えている。挿絵は熊本より多く、二枚の『西湖景』（双面連結式）を加えて、熊本の欠落する第四・七・十八・二十齣の四枚も揃っており、合計二十五枚がある。「國立北平圖書館收藏」という蔵書印を押されている。

第四齣　齋壇開會
崔小姐荐相國父孤魂虔誠設醮
張君瑞禮佛法僧三寶密約焚香

第七齣　母氏停婚
張君瑞尋盟赴宴圖夫妻好合
崔夫人背德停婚改兄妹稱呼

第十八齣　尺素成愁
逐一觀詳復轉書如逢對語寬前病
從頭整點將來物方見相思別後心

第二十齣　衣錦還鄉
金榜掛名時比闕初歸榮昼錦
洞房花燭夜西廂重整舊風流

その他、劉本の附録は熊本と基本的に同じであり、徐本の附録も加えた、三つの刊本の附録は以下の通りである。

徐本	熊本	劉本
西廂會真記	西廂會真記	
錢塘夢	錢塘夢	錢塘夢
	蒲東崔張珠玉詩集	蒲東崔張珠玉詩集
秋波一轉論	秋波一轉論	秋波一轉論
閨怨蟾宮	閨怨蟾宮	閨怨蟾宮
園林午夢記	園林午夢記	園林午夢記
松金釧減玉肌論	松金釧減玉肌論	松金釧減玉肌論
	鶯紅對弈	鶯紅對弈
	西廂別調	西廂別調
	西廂八嘲	西廂八嘲
	西廂八詠	西廂八詠

『釋義』と『注音』の部分については、内容から形式及び配置まで、劉本は熊本と全く同じである。また、題評においても、その内容と誤りや欠落の箇所が同様である。さらに、挿絵・版式・本文及び刊刻の時間（九年間隔）・場所（同じ建陽）・校正者（同じ余瀘東）などの状況を考え合わせると、劉本は熊本と直接の継承関係があると断定することができる。ただし、細かく比較してみると、両刊本の間に字体や、挿絵と附録の配置などの相違があることが分かる。従って、恐らく劉本は熊本の旧版で印刷したのではなく、新たに新版を彫って刊行したのであろう。

三　三種『重刻元本題評音釋西廂記』の伝承関係

『西廂記』刊本は覆刻されたものを除いて、全く同じ刊本が殆どない。三種の『重刻元本題評音釋西廂記』に限っ

て言えば、版式、体裁及び本文は基本的に同じであるものの、序文の有無、題評の異文、音釋の位置と詳略、附録の増減、及び挿絵と刻工などにおいて異同がある。とりわけ徐本と熊本、劉本との間には顕著な相違がある。

徐本には程巨源が著す『崔氏春秋序』と徐士範が自ら書く『重刻西廂記序』が載せており、この二篇の序文は『西廂記』の作者及びその評価などについて述べている。熊本には程序を載せて徐序がなく、劉本にはどちらもない。また、徐本には挿絵がなかったのに対して、熊本には二十三枚の挿絵があり、劉本は熊本の挿絵をそのままに翻刻する。徐本には黄鍇、黄鋟、黄峯、黄汝清など著名な刻工の名前が彫っており、熊本と劉本の本文には刻工の名前が標されていないが、挿絵に「盧玉龍刊」と記されている。

熊本では標題が三箇所（すなわち総目、毎齣の本文と挿絵）に見えるが、第八、十四、十七齣の標題で異同がある。熊本と劉本の校正者は同じく余瀘東であるので、この二つの刊本の異同は基本的に一致する。一方、徐士範本における標題の異同は以下の通りである。

齣数	総目	本文	釋義
七	母氏停婚	母氏停婚	**夫人**停婚
八	琴心寫**恨**	琴心寫懷	鶯鶯**聽琴**
十	玉臺窺簡	玉臺窺簡	**妝**臺窺簡
十五	秋暮離懷	秋暮離懷	**長亭送別**
十七	泥金捷報	泥金捷報	捷報**及第**
十九	詭謀求配	詭謀求配	**鄭恒**求配

そのうち、『釋義』と本文に六箇所の異同があるという点から考えると、『釋義大全』の標題は総目、本文とは系統が異なると思われる。『釋義』の全称は『北西廂記釋義大全』であるが、一方で巻首表題、徐士範の序文及び総目は全て『西廂記』と称す。『北西廂記釋義大全』の標題は明万暦七年（一五七九）少山堂刊本『新刻考正古本大字出像

釋義北西廂』とほぼ同じく、詞目と註釋はまた弘治本の『釋義』と大体同様である。

『重刻元本題評音釋西廂記』に収録される附録にも異同がある。徐本と熊本は、『西廂會真記』（すなわち元稹『鶯鶯傳』）を『西廂記』物語の淵源として収めている。読者には『西廂記』の出典を理解させると同時に、小説と戯曲の異なる創作趣旨と結末を比較させることができる。一方、『錢塘夢』、『園林午夢記』及び『松金釧減減玉肌論』などの附録は、書坊が人々の興味を引こうとして収めたものであり、実際には『錢塘夢』と『西廂記』物語は何の繋がりもない。熊本と劉本は徐本より『蒲東崔張珠玉詩集』、『鶯紅對弈』、『西廂別調』などの五種を多く収めているが、これも異なる読者の嗜好を満足させるためであろう。

「釋義」について、徐本は『北西廂記釋義大全』と題して巻下の最後に置き、熊本と劉本は『釋義』と名付けて齣ごとに本文の末に附す。その配置は異なるが、内容は全く同じである。それに対して「字音」は、三つの刊本いずれも「釋義」の後に続いている点では同じだが、熊本と劉本では内容がかなり削られている。例えば、第一齣の「孀」の注音には、徐本は「孀、音霜、無夫婦也」とするが、熊本と劉本は「孀、音霜」のみである。また、一頁にちょうど収めるために、超えた部分は全て削除されてしまった。巻下第五十五葉（表）に一行しか余白がないので、本来二行ある第二十齣の「字音」も一行となっている。従って、熊本と劉本は注音についてあまり重視しないと言える。

徐本は現存する早期の『西廂記』評点本であり、熊本と劉本は徐本の評点内容と類似しているが、次の表に載せた箇所を具体的に比較してみると相違点が明らかになる。

『重刻元本題評音釋西廂記』題評の異同表

	徐本（萬曆八年）	熊本（萬曆二十年）	劉本（萬曆二十九年）
第二齣	七青八黄、掂斤播兩、俱鄉語、今南中亦有之。	七青八黄、掂斤播兩、俱鄉語、今吴中亦有之。	七青八黄、掂斤播兩、俱鄉語、今吴中亦有之。
第四齣		三寶：佛也、法也、僧也。	三寶：佛也、法也、僧也。

第五齣（1）	西廂詞多用兒字於**情**近於事諧、故是當家。	西廂詞多用兒字於**指**近於事諧、故是當家。
（2）	此鶯鶯自怨自艾之辭、可入神品評者。	此鶯鶯自怨自□之辭、可入神□□者。
（3）	**颩**音丟、或音準。	風音丟、或音準。
第六齣（1）	此草木出羅浮山、乃男寵所致祥異、世人多不識之。	此□□出羅浮山、乃男寵所致祥異、世人多不識之。
（2）	你明博得二句□□□反承、妙□。	你明博得二句對而意反承、妙甚。
第七齣（1）	□□□人停婚、自是聡□女子、□□□憂離之思轉逼迫甚矣。	此忖夫人停婚、自是聡慧女子、然望合憂離之思轉逼迫甚矣。
（2）	□本作「我却待□轉秋波。」	趙本作「我却待目轉秋波。」
（3）	江州司馬、白樂天。	江州司馬、白樂天**事**。
（4）	□□信然、豈有□多之病歟？	寛之信然、豈有務多之病歟？
第九齣	**史**記刺繡文不如倚市門。	**文**記刺繡文不如倚市門。
第十一齣		菱花、鏡也。狀若菱花。魏武帝時有此制。
第十四齣	淫妬、忸**怩**、咎悔之情三者備矣。	淫妬、忸**怩**、咎悔之情三者備矣。
第十五齣（1）	此折叙**離**合情緒、客路景物、可稱詞曲中賦。	□□□**離**合情□、□□景物、可□□曲中賦。
（2）	擧案齊眉乃梁**鴻**故事。	擧案齊眉乃梁**鷄**故事。
（3）	眼中流血心水成灰、□商人□□。	眼中流血心水成灰、亦商人故事。
第十七齣	此意本鄒長**倩**遺公孫賢良書來。	此意本鄒長**猜**遺公孫賢良書來。
第十九齣	三學究語一段天成。	□□□語一段天成。
第二十齣	收煞一篇**意思**在此兩句。	收煞一篇**關鈅**在此兩句。

第五齣（1）	西廂詞多用兒字於**指**近於事諧、故是當家。	西廂詞多用兒字於**指**近於事諧、故是當家。
（2）	此鶯鶯自怨自艾之辭、可入神品評者。	此鶯鶯自怨自□之辭、可入神□□者。
（3）	□音丟、或音準。	風音丟、或音準。
第六齣（1）	此草木出羅浮山、乃男寵所致祥異、世人多不識之。	此□□出羅浮山、乃男寵所致祥異、世人多不識之。
（2）	你明博得二句對而意反承、妙甚。	你明博得二句對而意反承、妙甚。
第七齣（1）	此忖夫人停婚、自是聡慧女子、然望合憂離之思轉逼迫甚矣。	此忖夫人停婚、自是聡慧女子、然望合憂離之思轉逼迫甚矣。
（2）	趙本作「我却待目轉秋波。」	趙本作「我却待目轉秋波。」
（3）	江州司馬、白樂天**事**。	江州司馬、白樂天**事**。
（4）	寛之信然、豈有務多之病歟？	寛之信然、豈有務多之病歟？
第九齣	**文**記刺繡文不如倚市門。	**文**記刺繡文不如倚市門。
第十一齣	菱花、鏡也。狀若菱花。魏武帝時有此制。	菱花、鏡也。狀若菱花。魏武帝時有此制。
第十四齣	□□、□**侂**、咎悔□□三者備矣。	淫妬、忸**怩**、咎悔之情三者備矣。
第十五齣（1）	此折叙**誰**合情緒、客路景物、可稱詞曲中賦	□□□**離**合情□、□□景物、可□□曲中賦。
（2）	擧案齊眉乃梁**鷄**故事。	擧案齊眉乃梁**鷄**故事。
（3）	眼中流血心水成灰、亦商人故事。	眼中流血心水成灰、亦商人故事。
第十七齣	此意本鄒长**猜**遺公孫賢良書來。	此意本鄒长**猜**遺公孫賢良書來。
第十九齣	□□究語一段天成。	□□究語一段天成。
第二十齣	收煞一篇**關鈅**在此兩句。	收煞一篇**關鈅**在此兩句。

紙幅の関係で三つの刊本の題評の主な異同のみを載せたが、これらの例文から三者の相違を窺うことができる。まず、第四齣と第十一齣の題評は徐本になく、熊本と劉本にある。もともとあったものを徐本が削ったか、それとも熊・徐両本が新たに加えたかは不明である。

次に、第二齣、第五齣（1）、第九齣、第十五齣（2）、第十七齣、第二十齣の題評は、徐本と熊本・劉本との間で異同がある。そのうち第二齣の「南中」と「呉中」には文字は異なるが意味は同じである。第五齣（1）における徐本の「於**情**近、於事諧、故是當家」は、「於**指**近、於事諧、故是當家」より相応しく思われる。第九齣においても、「刺繡文不如倚市門」は『史記』巻一百二十九「貨殖列傳」に見えるので、徐本が正しい。第十五齣（2）と第十七齣の二箇所も明らかに熊本と劉本の誤刻である。第二十齣の熊本と劉本の「關鈅」は「関鍵」「重要」という意味であるから、徐本の「意思」よりは優れているように思う。

第三、徐本が欠落して、熊本と劉本が完全に残る題評である。例えば、第六齣（2）、第七齣（1）、（2）、（3）、（4）、第十五齣（3）では、徐本の欠落箇所を熊本で補うことができる。第七齣（3）の徐本は「江州司馬、白樂天」であり、熊本と劉本は「江州司馬、白樂天事」であるが、次の題評を見ると、三つの刊本はすべて「白頭吟、卓文君事」となるので、「白樂天」の後にも「事」の一字があると考えた方がわかりやすい。

最后、第三とは逆に、第五齣（2）、（3）、第六齣（1）、第十四齣、第十五齣（1）、第十九齣の題評は、徐本で熊本と劉本に欠落がある。たとえば第五齣（3）の注音は徐本で「颭音丟、或音準」となっているが、熊本では「颭」の字がはっきり見えず、劉本では「風」にしている。本文の【正宮】【端正好】の歌詞は「不念法華經、不禮梁皇懺、颭了僧伽帽、袒下偏紅衫」であるから、徐本が正しい。

これまで見てきた題評の異同をもとに、三種の『重刻元本題評音釋西廂記』の性格と伝承関係をどう判断すればよいだろうか。前述のように、蔣星煜は熊龍峯本を実見しないまま、「熊龍峯刊本も徐士範刊本によって翻刻されたもの」と結論付けている。しかし、上述した題評の異同、とりわけ「徐本にはないが、熊本と劉本にはある」及び「徐本のみ欠落部分がある」題評の存在、また音注の内容と配置、釋義の様式と位置、附録の増減及び挿絵の有無などを考え合わせると、「熊龍峯刊本も徐士範刊本によって翻刻されたもの」とは言いがたい。恐らく熊本は徐本その

ものではなく、徐本の元本に基づいて刊行されたもの、言い換えれば、熊本と徐本は同じ祖本であったが、熊本は刊刻する時に徐本を参照しながら新たに挿絵を加えたものだと考えられる。また、劉本は完全に熊本を翻刻したものと思われる。

四　おわりに

現存する『西廂記』明刊本は、早期の弘治本から、その内容と体裁がずっと変化し続け、万暦期に至って漸く形を定め、四大版本系統（すなわち『題評音釋』系統、『重校北西廂記』系統、碧筠斎古本系統、万暦間「時本」系統）を形成した。そのうち、徐士範本『重刻元本題評音釋西廂記』、継志斎本『重校北西廂記』、『重刻訂正元本批點畫意北西廂』及び容與堂本『李卓吾先生批評北西廂』は、従来四大版本系統の代表作だと認められてきた。

このうち徐本は明代においてすでに善本と認められ、『西廂記』版本の変遷に大きな影響を与えた。また鄭振鐸によって発見された劉本も公認される善本であり、徐本は刊行時期が最も早いため、熊本と劉本の祖本と言われた。これらの三種の刊本に対し、本稿では、版式、体裁、序文、本文、題評、釋義、附録及び挿絵などの異同に詳細な考察を加えて、熊本の特徴を明らかにした。要するに、熊本は徐本の祖本である元本に基づいて刊行されたものであり、劉本は熊本を翻刻したものである。

熊本は十七世紀の初頭に『本草綱目』などの漢籍と一緒に長崎で林羅山に購入された後、昌平坂学問所、浅草文庫を経て内閣文庫に収められたと推測できる。江戸時代、幕府及び各地の大名は中国の小説と戯曲にも興味を持ち、福建や寧波から輸入した。熊本は日本において『西廂記』の伝播に推進的な役割を果たしたと言える。

『西廂記』の元写本は、残念ながらすでに伝存しない。明代の書坊は「元本」に基づくと言いながら、その時代の読者に合わせて元雑劇『西廂記』を南曲伝奇に改変した。また、本文以外に『西廂記』に関する文献や詩文を附録し、本文の中に題評や釋義注音を付け加え、さらに挿絵を添えるなど、売上増を企図した。『重刻元本題評音釋西廂記』はまさに当時のこのような状況を反映したものである。そのうち、熊本の二十三枚の挿絵、及び当時において

極めて人気の高い『西廂會真記』『錢塘夢』『西廂別調』『蒲東崔張珠玉詩集』などの十一種の附録は、すべて異なる読者の興味とニーズを満足させるために加えたものであり、顕著な商業販売の息吹を帯びると同時に、高い審美価値と深遠な文化的意義も持ち合わせる。従って、蔣星煜が

> 如果我們根本不知道熊龍峯刊本、那末、從徐士範刊本演變到劉龍田刊本的過程就不完整了、不可能像現在這樣清楚了。從「元本題評音釋西廂」這一本刊本系統來説、熊龍峯刊本確是一箇承先啓後的版本。[11]
>
> もし我々が熊龍峯刊本を全く知らなければ、徐士範刊本から劉龍田刊本への変遷の過程は完全ではなく、現在のようにはっきりとさせることはできなかった。「元本題評音釋西廂」という刊本系統から言えば、熊龍峯刊本は確かに前を承けて後を啓く一つの刊本である。

と指摘したように、熊本はまさに徐本と劉本の間に前を承けて後を啓くという役割を果たした刊本なのである。

注

(1) 蔣星煜「論徐士範本『西廂記』」(『西廂記的文献学研究』所収、上海古籍出版社、一九八三年、第六十五頁)。
(2) 同上注、第七十一頁。
(3) 鄭振鐸『西諦書話・中国版画史序』、三聯書店、一九八三年版。
(4) 同注(1)、第七十三頁。
(5) 『日本所蔵稀見中国戯曲文献叢刊』(黄仕忠等編、広西師範大学出版社影印本、二〇〇六年)第一輯に内閣文庫本を収録。
(6) 詳しくは『徳川実紀』(吉川弘文館、一九六四年)第一編所収「台徳院殿御実紀巻五」及び『羅山林先生集』(内閣文庫所蔵)附録巻一所収「年譜」を参照。

（7）張人和「徐士範本『西廂記』並非孤本」（『文献』一九八六年第四期）を参照。
（8）蔣星煜「論徐士範本『西廂記』」（『西廂記的文献学研究』第五十三頁）を参照。
（9）龍洞山農「刻重校北廂記序」（継志斎本『重校北廂記』、内閣文庫所蔵）巻首。
（10）王驥徳「新校注古本西廂記自序」（『中国古典戯曲序跋彙編』巻六、斉魯書社、一九八九年）第六四八頁。
（11）蔣星煜「余瀘東氏生平及其校正本『西廂記』」（『西廂記的文献学研究』所収、第八十四頁）。

（附記）
本研究は、JSPS 科研費（16K02596 基盤研究C「日本所蔵『西廂記』孤本の調査と研究」）の助成を受けたものである。